

『あきた留学生交流』
第22号 (2010.3)

冒 頭 言



国際教養大学

学長 中 嶋 嶺 雄

グローバル化の進展にもかかわらず、最近では世界的な経済危機や秋田県における経済活動の低下によって、本県では外国人登録者数が減少傾向にあるという。秋田県にとっては決して好ましいことではない。

一方、本県への留学生の数は増加傾向にあるとのことでこれは朗報だといえよう。主な受入れ先として、秋田大学、秋田県立大学のほか、2004年に開学したグローバル・スタンダードの国際教養大学が全学生の1年間の海外留学を義務付けていて海外の大学との交換留学を推し進めているため、世界のトップレベルの大学約100校からやって来る留学生も年々増加しつつあり、秋田県へ留学する学生数が全体的に増えているからだといえよう。この点では、国際教養大学は国際貢献のみならず、地域貢献にも役立っているといつてよいであろう。現に一学年定員わずか150名の国際教養大学に昨年9月1日に始まった秋学期に入学した留学生は全世界各国・地域から116名、継続している留学生が13名、この冬学期には台湾の淡江大学から短期のウィンタープログラムに20名の学生がやってきて、雪の秋田を満喫するとともに、きわめてレベルの高い日本語のプレゼンテーションを展開して、私も大変感激した。

四季折々、秋田におけるキャンパスライフには東京では絶対に味わえない醍醐味がある。本

学の場合、春から秋にかけて、私が居住しているゲストハウスのプラザクリプトンからキャンパスの学長室まで、秋田杉の小径を10分ほど散策して着くことができる。5月頃は水芭蕉の白い花の群生を見ながら、また秋には美しい紅葉の木々を潜り抜けて来ることができる。さらに、夏の竿燈まつりへ参加する留学生は日本人学生とともに練習を重ねて真剣に参加している。雪を見たことのないシンガポールや台湾などからの学生は、沖縄や奄美大島、五島列島などの日本の暖かい地方からの学生とともに、冬に校庭で「かまくら」を作って大喜びしていた。大学が東北、特に秋田に存在すればこそその恩恵であって、私も大変満足している。

これからも秋田の地が留学生にとってまたとない「日本再発見」の場となるべく、本学もより一層の国際貢献・地域貢献を続けていきたいと思っている。

第22号
2010.3

あきた 留学生交流



「秋田の農家民泊」に参加した留学生、日本人学生、受入農家のみなさん

秋田地域留学生等交流推進会議
Akita Inter-regional Council for Promotion of Foreign Student Exchange